

災害史の視点

笹本 正治

A STUDY OF DISASTER HISTORY

By Shoji SASAMOTO

Synopsis

In the field of history Disaster History has been studied from the viewpoint of Incident history and also in the science and engineering field from that of Prevention of Disaster History. In order to view Disaster History from a fresh perspective, however, one has to consider various disasters as a whole and one has to make it clear how the community has changed its way of looking at a variety of disasters in the course of time as well. This article, therefore, aims at dealing with Disaster History from the standpoint that it should be studied over a long period of time rather than a short one.

1. はじめに

昨年奥尻島を襲った地震と津波、引き続きおさまらない雲仙普賢岳の噴火、さらには冷害による凶作と、災害に対する社会関心は近年あらためて大きな高まりを見せている。そうした中で、社会のニーズに応じながら災害に関する研究を進展させてきたのは、ややもすれば理科系の研究者であった。この状況下で文科系の研究者は何をすべきか、特に災害とも密接な関係を持ってきた歴史学は、どのようなことを独自に主張していくべきかを考えていかなければならない。

小山靖憲氏は平成4年(1992)度京都大学防災研究所研究発表講演会において、独立した分野としての災害史研究が必要であることを強調された。私も基本的に氏の主張のごとくあるべきだと考える。

そこで本稿では、どのような視点を持てば災害史として独立した分野になり得るのか、日頃思っていることをまとめながら、歴史学からの提言を試みたい。

2. 従来の災害史研究

近年の災害に関係する人文科学系の学問研究の進展は著しく、社会学・社会心理学をはじめとする研究者も災害が起きた後に現地へ行って、アンケート調査などを行い、多くの成果を上げている。この場合、研究者は自分の目的に従って、調査者と対話したり、調査票に書き込まれた解答によって、災害関係者に直接問いかけ、自分の研究目的に応じた知識を得る。災害時の状況を、研究者の視点でさまざまな角度から、独自の発想に従って直接調査できるのである。

しかしながら、歴史的な災害においては、よほど特殊な近・現代史でもない限り、事件の当事者に聞き取り調査をすることはできない。歴史学は意図的もしくは偶然に伝わった、古文書や記録などの史料を基にして、事実を読み取らねばならない。したがって、自分が知りたいと思う情報を常に史料から得られるわけではなく、むしろ史料から得られる情報をもとに、自分の問題を確認することの方が多い。

人間が他のもの（人・神・動物など）に意図を伝えようとする手段は、声や音をはじめとして多様であり、目下のところ歴史学が最も重視する文字で書かれた文書や記録は、その伝達手段のほんの一部をなすに過ぎず、史料はさまざまな限界性を有する⁽¹⁾。仮に中世のある年に、ある場所で災害が起きていたとしても、史料が残らない限り、その災害は現在に伝わらない。ひとつの村を大災害が襲い村人が全滅した場合、領主側などでこれを記録していてその記録が残れば、歴史年表などに書き込まれるが、災害で亡くなった村人が記録することはあり得ないので、当事者の情報は得られない。孤立した村であれば、ほとんど情報が伝えられないままの場合もあり得る。過去の歴史事実は記録化がされていなければ、どんな大事件でも見過ごされてしまう可能性がある。逆にその当時としてはごくありふれた事件であっても、記録者にとって大事件として意識され、そのように記録が伝わっていれば、実際は大したことでなくても、大変な災害があったとして後世の人々に認識される。

この条件は、文字史料を作ることのできる側（貴族や武士などの支配者層、寺や神社の関係者など）に関する史料が残りにやすいことを意味する。逆に文字を書くことができず、あるいは紙や筆などの筆記用具を入手しにくい、一般民衆に関係する史料ほど伝わらないことになる。このため、一般的傾向としては政治・文化の中心地から離れた地点に関係するほど史料が残りにくい。また、記録化された文書などを伝える装置（文書蔵・長持など）を用意できる者たちほど、記録が伝えられやすい。民衆の場合、家の中に文書を伝える空間も、その手段も持ち合わせないことが考えられる。さらに、時代が経過すれば経過するほど史料は残りにくい。これは時代とともに文字を書ける人の広まり、文書の絶対量の増加する一方で、逆に時間経過とともに不慮のできごとなどにより文書が失われるといった要素による。

いずれにしろ、過去の出来事を歴史的に扱う限り、ほとんどの場合、史料的な制約を受けることは間違いない。当然ここで扱う災害史も同様である。

理科系の人は災害は再び起こる、もしくは確実な理由に従って起こるものと考えており、場合によると実験などで追体験もできることが科学の前提となる。科学的に原因と結果の関係が明らかで、同じ条件下であれば繰り返し起こることが実証されて学問となっている。したがって災害の場合も、同じ条件になれば同じ災害が繰り返されることが暗黙の了解になっている。防災研究もこれが基礎になっており、過去の事実の確認のもとに、再び災害を繰り返さないためにはどうすれば良いかという目的意識が明瞭である。

しかしながら、歴史学においては歴史的事実の追体験ができない。研究者も同じ事件が二度繰り返されることを前提にはしない。たとえば、日本の明治維新を中心に研究をしている人は、明治維新が再びあるとして研究をしているわけではない。理科系では公式などによって証明され、条件が同一であれば再び繰り返されるとして、問題を考えていくのに対し、歴史学では事件は一回限りの、繰り返しが不可能なものとして検討される。理科系の学問と異なって、歴史を同じ条件において再度繰り返して検証することは、まったく不可能なのである。ここに歴史学と理工系の学問との大きな差があるように感じられる。

以上述べてきたことを前提に、これまでの災害史研究には二つの大きな潮流があった。その一つは歴史学の立場から災害を扱うものである⁽²⁾。その特徴は、

1. 災害を過去に起きた事件のひとつとしてとらえる。
2. 災害が社会に与えた衝撃を、他の事件と同じような性格を有するものとしてとらえる。
3. 災害によって社会の仕組みがどのように変わったのかなど、時間経過の変化に着目する。

などといった点にある。

こうした見方により歴史学では、災害も歴史の一コマと見なす。明治維新も浅間山の噴火も同じ歴史的事件のひとつとして、歴史全体を解明する対象になるのである。そして、歴史的事実はまったく同じことが繰り返されるのではなく、基本的に二度と同じことが起きないとの立場に立つといえる。また、歴史学は基本的に過去のできごとなどを追究するので、現在生きている人々の生命を直接預るといった、理科系の災害研究者が持つような緊張感が弱く、社会的に即座に役に立つ学問だという認識も少ない。

もうひとつは現時点での災害対策の手段として、過去の災害に学ぼうとするもので、主として理科系の人

たちによってなされている。その視点の特徴としては、

- 1・災害を繰り返さないために、過去の実態を探る。
- 2・災害の被害を軽くするためのヒントを、過去に起きた事実を求める。
- 3・今後の災害対策の一環として、過去の被害などを明らかにする。

などを挙げることができる。この場合の視点の特徴は、災害は繰り返されるものであるから、過去に学び災害の備えをしなくてはならないという点にあり、基本的には防災の手段を考える手だての一つとして、歴史を利用する立場である。

これら防災のための歴史研究の視点が、社会に歓迎されていることは周知の事実であり、とくに地震の予知や津波などの警報は、過去の歴史的な事実をもとに災害の周期をはかったり、被害の程度や災害襲来地の予測などを行っている。災害対策のために歴史的災害の情報を集め、それを今後に生かしていくことが今後とも必要であるのは言をまたない。したがって、災害史研究が必要とされる大きなよりどころの一つが、防災のための基礎研究にあることは何人も認めるところで、今後これをもっと進展させていかねばならない。ここに歴史学と理工系の人々との、共同で行う防災史の意義がある。

防災のために過去の災害を研究する視点を最もよく表わしているのが、災害直後の総合調査である。そこではまず被害の実態追求がなされ、何ゆえに災害が起きたかを科学的に明らかにし、これを基にして災害原因を取り除くための防災工事がなされる。どうすれば災害が防げ、あるいは被害が弱められるかを知るために、災害の具体的状況を確認する。これに従って堤防などの防災施設や、家々の建築もなされるのである。またアンケートなどを通して、災害時の人々の行動を確認し、社会心理学その他の方面からどのように対処したら良いかが考察され、避難計画も練られる。

しかしながら歴史災害になると、こうした調査は不可能であり、史料の限界の上でしか研究はできない。一方で歴史学者の場合には、過去にそのような災害があったかどうかを調べ、災害が繰り返されるものかどうか、過去とのかかわりで確認することはできても、防災的視点は弱い。

防災を前提としての災害史研究は、災害がいつの時代にも、そして誰にも起こる可能性があるだけに、現在の緊張感に満ちた研究といえる。直接人間の生命にかかわるため、多くの費用が投入されて、緊急に研究されねばならない。すべての人間がいつか、どこかで災害に見舞われる可能性を持つので、防災史研究に対する国民の期待も大である。

3. 災害史研究の問題点

上述のような災害史研究の大きな流れの上に立って、災害史は他分野と異なる独自の分野を打ち立てられるか否かを知るために、これまでの研究上での問題点を挙げてみよう。

歴史学の分野からなされる災害の研究で一般的なのは、事件としての災害史を扱うものである。これは特定の災害を表題（研究対象）として、その実態を事細かに史料から構築する点に特徴があり、その災害の原因やその後の影響を探る。しかし、事件としての災害史では、災害は政変や事故などと同じく、歴史上に起きた事件の一例として着目されるに過ぎず、災害の歴史を研究することで、ほかの歴史研究と異なった主張ができるといった、歴史学の独立分野にはなっていない。たまたま興味ある事件の一つに災害があるのであって、災害史はほかのことと異なったこうしたものが見えてくるはずだといった、独自性を主張するには至らないわけである。

次に、災害全般をまとめて研究するものがある。現実には、個々の歴史災害の事実を総合したような形で論じられることが多く、事件としてたまたま災害だけを取り上げた側面が強い。この場合も政治史、経済史、思想史などのように、独自の手段・視点などを前提にしての災害全般をまとめるには、まだ至っていない。つまり、災害史として独立する特別な理由を主張する必然性があるわけではないのである。

さらに、特定の事件解明の背後に災害を見ようとするものがある⁽³⁾。この場合、主体は事件で、それを

解明する手段として災害にも目が向けられる。歴史の多面性を理解する素材の一つに災害も位置付けられることになる。したがって、こうした視点は事件史の一つの変形になり、これも目下のところ独立した災害史とはなっていない。

歴史学の視点は、政治史・経済史・思想史などの分野があるが、基本的に人間の社会的営みや、人間そのものに対する興味が強い。逆に、理科系の分野については基礎的知識に欠けることが多く、災害についても基本的メカニズムなどの認識の不足が大きいことが予測される。そのため災害史とはいっても、理系の人が持つ災害の原因論など、災害そのものへの知識を欠いたまま、災害にまつわる人間の動きなどの解明が中心にならざるを得ない。これはまた、災害を記録した者がそうした視点を持っていないだけに、記録者の視点から災害やその時の社会を見ることにつながる。

ちなみに歴史学では事件そのものに対して、プラスやマイナスの評価は原則としてしない。起きてしまった事件に対してかくあるべきだと論じたところで、歴史的事実が変化するものでないからである。たとえば、明治維新はどのようにしたら起きなかつたらうとか、この人間は悪人でこの人間は善人だといった命題を立てることを、歴史家はあまりしていないのである。

一方災害対策の側では、地震・火山噴火・津波・土石流など、特定の災害の歴史全体を研究対象とするものがある⁽⁴⁾。この場合、特定の災害の専門家が、その災害の歴史を確認することが多い。この結果、災害そのものの歴史に主体がおかれ、特定の災害の歴史となり、広い意味での社会全体に目が向けられることが少ない。特にこの場合、理科系の地震や火山噴火などの専門家が研究する率が高く、災害そのもののメカニズムは着目されるが、社会など人間の側のとらえ方が弱いように感じられる。歴史学が主として人間の側に主体を置いているのに対し、理系の研究は自然などの側に主体を置いている点に特徴がある。いずれにしろ、これをもって独立した総合的な歴史の分野をなす災害史とすることには躊躇を覚える。ある意味では、災害研究の一分野、防災のための一分野としてしか、研究者の側も認識していないのではなかろうか。

また、大きな災害の記録化もこの流れに加えることができよう⁽⁵⁾。この場合には理工系の研究者と共に、社会学や心理学・歴史学など他分野の人々の共同研究としてまとめられる割合が高い。目的は犠牲者の鎮魂、災害を繰り返さないための方策を確認しようとする点に置かれることが多いが、やはり独立した災害史とはなっていない。多くは災害直後に編纂され、圧倒的な迫力で災害を伝えるだけに、災害予防のためにも記録化は推進していく必要がある。この記録化自体が歴史学の立場からすると今後の史料になり得るものであり、その意味でも災害直後の記録化は必要である。

歴史学との接点を持つものに、地域の災害の歴史をまとめる研究がある⁽⁶⁾。多くの場合、地域の歴史の特性を知るため手段の一つとして、災害に目を向ける。事件史を取り纏めて概説し、地域史の中で特定の事象を扱った側面が強いので、地域災害の過去の具体的な様子を述べるにとどまることが多い。しかしながら、この研究によって地域の災害の特徴が明らかになり、特にどのような災害が繰り返されるかが判明するので、将来の防災対策がやりやすくなる。また地域の研究はそのまま災害史の裾野を広げ、災害史そのものを押し上げる力になるので、こうした研究も押し進めねばならない。そしてこの方向は地域史・郷土史を学ぶ人々との接点を多く持ち得る。

さらに災害全般をまとめた年表や災害歴史を解説した辞典なども出版されている⁽⁷⁾。災害の概略を知ったり、災害史の目下のところの手引書としてはうってつけである。これらは総合的な災害認識の手段にはなるが、それだけでは独立した災害史研究にはなり得ない。単に災害の事実をまとめるだけでなく、そこから他の分野と異なる災害史独特のどんな視点が生み出せるかが課題になろう。

なお近年は、災害の起きる地帯には独自の文化が存在するのではないかといった、広い視点で総合的に災害を考えていこうという動きもある⁽⁸⁾。これは災害史研究の大きな立脚点のひとつとなり得るだろう。

4. 災害史研究の周辺

近年の学問の進展の中で、歴史的事実が歴史学のみならず多方面の分野から研究されるようになった。そしてひとつのテーマのもとに歴史学者・民俗学者・考古学者などがシンポジウムを開く機会が増えた⁽⁹⁾。こうした動きはとくに古代史や中世史で見られるが、この動向は災害史研究においても効果を発揮すると考えられる。たとえば、特定の災害に関係して、歴史家は史料でその事実を確認し、考古学からは発掘成果として災害を確認し、民俗学からはそれにまつわる伝承を集めて分析し、理工系の人からはそのメカニズムを分析するなど、多くの分野の人達が集まって多角的に追求すれば、お互いの情報交換にもなり、これまで知られていなかった事実や気がつかなかった視点などを確認することができるかもしれないのである。

近年災害研究を進化させた分野のひとつが考古学である。考古学の発掘の中に災害を見、それを災害予知にまでドッキングさせていこうとする方向性は、たとえば近年の地震考古学をリードする寒川旭氏の仕事などに代表させることができよう⁽¹⁰⁾。また遺跡がなぜできたか（遺跡として廃棄された理由）も、考古学では大きな研究の部分を占めるが、その中で災害を考えねばならないこともある。

民俗学では災害をいかに除去するかといった視点での研究対象として、集落に災害が入らないようにする道祖神や塞神信仰がある⁽¹¹⁾。村の入口などに道祖神や塞神、さらには巨大な草鞋などを置いて、これらの神の力によって悪霊や疫病などが村に入り込まないようにしようという民俗で、日本人の災害観と直結し、過去の日本人がいかにして災いを避けようとしたかの一端を伝えている。またこれと関係する習俗に辻切りなどがある⁽¹²⁾。これらは村の入口に注連縄を張って、村に災厄が入り込まないことを意図した習俗で、注連縄で区切られた場所を神聖な空間として、ここに他から悪いことをもたらす神や霊などが入るのを遮断しようとする考え方である。こうした習俗のベースには神と接触できる場である、辻や村境の特性に対する日本人の考え方が凝縮されている⁽¹³⁾。つまり、日本人にとって災害は、悪霊や悪神などによってもたらされると想起されていたのである。そしてこうしたものが入ってきたり、人間と接触する場所があるはずだということで、村はずれや辻が意識され、そこでさまざまな儀礼が行われた。さらに災害が入ってしまった後の虫送り、疫病送りなどの研究がなされている⁽¹⁴⁾。たとえば、稲の害虫が発生したりすると、村境までそうした虫を鐘や太鼓で送り出すのである。疫病送りも同様で、入ってきた疫病の神様を村の外に送り出す習俗である。特にこの場合、鹿島に送り出されることが多い。

このような発想は村だけに見られるのではない。その代表が四角四境祭で、疫病や天皇の不豫が予想される場合などに、原因は鬼気（疫神・疫鬼など）が起こしたと考え、鬼気が外から侵入するのを道路上で祭って追い出すものである。大内裏の四隅と京師の四隅で行うものを四角祭、山城国の国境で行うものを四境祭という。鎌倉幕府でも幕府の四角と鎌倉の四境で行っている。逆に村や町は最初からこうしたことを前提に神や仏に守られた空間として意識され、都市計画がなされた。都市史の研究と災害史の研究は、今後もっと密接な連絡が必要になるであろう。村の入口に神社や寺を配し、それによって村を守ろうとしたり、四隅に神社や寺を配置して町をつくろうとする考え方は多いのである。そしてこれはもっと小さい（狭い）レベルでいうと、家を作る時に鬼門の位置に屋敷神を配置するなどの考え方にもなっている。

このことはどの時代にあっても、その時代なりの防災意識があったことを示す。従来防災と言うと、現代の土木工事に代表される対処が想起されがちであるが、各時代には各時代なりの防災の方法があり、特に土木工事以上に、精神面での防災の占める役割が大きかったのである。

また民俗学では信仰面で雨や水の神⁽¹⁵⁾、地震の神・鹿島信仰や要石を扱うことが大きな部分を占めてきた⁽¹⁶⁾。こうした精神的な災害観と実際の災害観、さらには歴史的な災害観をつなげることが今後の課題になろう。

文化人類学・民俗学の方面では、安政2年（1855）10月2日に江戸を中心に起こった大地震を契機に大量に出回った鯰絵を素材にして、日本人の意識を探ろうとしたC・アウエハントの『鯰絵』⁽¹⁷⁾が注目される。今後このように特定のモノを通じて、災害意識を研究する視点が大事になろう。また、災害に対する思想や

防災の習俗などを国や民族を越えて比較検討する必要もある。

歴史学においても近年は場のもつ意味の研究が盛んになり、そのなかで災害を遮断する意識を持った、境界論が大きな位置を占めるようになってきた⁽¹⁸⁾。そして、そこで行われたさまざまな呪術や儀礼についても明らかにされつつある⁽¹⁹⁾。こうした儀礼や呪いは歴史学と民俗学などとの共通問題でもあり、今後この方面からの災害史研究もさらに進展するだろう。

近代以来大きな問題となっても依然として続き、また時代経過と共に新たなものが生まれている公害、現在の医療の進展に対応して過去の衛生状態などをどのように見るかといった健康、老人問題や子供の問題、近年世界各地で頻発する地域紛争を前提にして、戦争をどのようにとらえるかなど、細部においてはさまざまな災害史に直結する問題が、多くの分野において提示されるようになってきたことも忘れてはならない。

こうした研究動向と共に、災害の概念自体もさまざまであり、かつ時代と共に変化しており、従来は災害として意識されなかったような事柄が新たな災害と認識されるようになってきている。

5. 歴史学からの視点

それでは、前述のような学界の動向の上に、独立した歴史学の分野としての災害史は、どのような視点を持つことが望まれるのであろうか。目下の私の関心とも重ねて、少し思いつくままに挙げてみたい。

まず何よりも、何年に起きた地震といった特定の事件史としての災害研究ではなく、社会全体を解明する手段の一つとして災害史もあるべきだと考える。従来はややもすれば、一回限りの事件として、災害のありさまを細部に至るまで明らかにすることが多かったけれども、災害に対して社会がいかに対応したかなどの事実解明を通して、災害の起きた社会の災害への対応の仕組み、共同体の相互扶助のあり方などを確認することが、災害史という独自の分野を歴史学の中に作る大きな意義になる。このためには、特定の災害だけを特殊な事件としてとらえるのではなく、さまざまな災害に対する社会の反応を総体として考察する必要がある。

そのような結果として、時間経過（歴史経過）の中で人々の災害に対する反応が、いかに変わっていくかが明らかにできるだろう。この際には災害そのものが短時間に与えた変化と、長い間に与えた変化の二つに注意しながら、相互から災害の影響を注目する必要がある。これまではややもすれば災害が起きた時点に絞って研究がなされていた。しかし大事なのは、災害が起きる以前にその社会はどのような状況であったのが、災害を契機にしてどのように変わったかを明らかにすることである。そして災害を事件として、短期間の出来事としてのみ扱うのではなくて、災害が起きる 50 年前、100 年前、さらに災害が起きた 50 年後、100 年後にその災害が社会にどのような影響を与えているか、長期的な変化をも知ることが大切なのである。

具体的な研究にはどのようなことが考えられるのだろうか。社会や各家、個人が災害に対しどのような準備や体制を整えていたかが問題になる。まったく災害を想定していない社会などはないであろうから、その予防策を明らかにする必要がある。災害が起きる時に個人はどのようにするのか、次に社会の基礎単位である家はどのような用意をしていたのか。個人や家レベルの対応はなかなか確認できないかもしれないが、この視点を大事にしたいと考える。

災害が起きた時に、地域共同体はいかにして連絡したり、被害に対応し、罹災者を助けるのであろうか。たとえば村の中で火事が起きた時には、村の中にどのような対応関係が生まれるのか。周囲の村ではどの程度までが駆けつけるのか。その連絡はどうなっているか。地震のような大規模災害の時にはその対応はどのようになされるのか。飢饉と地震とでは人々の対応がいかに異なるのか。堤防が切れたりした時にはどの範囲の村々が対応するのか、またそうした村は常に固定されているのか。災害に備えて村の中、及び他の村と、日常的つながりはどうなっているのかなど、具体的に解明していかななくてはならない問題点は多い。

近世の五人組帳前書を見ると、盗賊などがあった時に「なり」（鳴り）を立てて捕らえるように記されている（盗賊なども襲われた村や個人にとっては災害の一つといえよう）。そして、もしその時にやって来ない者があったなら詮索するとしている。この「なり」は声・貝・拍子木・太鼓・鐘などであるが、こうした連絡用の道具によって人々は連絡をとっていたのである⁽²⁰⁾。音などで呼び出される範囲は村の中に限らず、大きな事件の時にはいくつかの村が横につながっていた。この村々の連合は、とくに洪水や大火事など広域にわたる災害に際して大きな機能を持った。家々、村々などのつながりがどのように重なって、災害に備えていたのかは重要な問題になる。

また、災害が起きた後にはどのようにして復興するのか。その時の助け合いはどうなっているのか。どのようになったら復興がききめられるのか。復興の後に、災害に対処する手段はどのように改められるのかといったことも問題になる。戦国時代に戦乱に巻き込まれて焼き打ちを受けた村はほとんどの場合、その後復興している。戦乱に巻き込まれることも災害の一つといえようが、村人は戦乱に巻き込まれないように財産を寺社などに預けたり⁽²¹⁾、山小屋に身を隠したりしていた⁽²²⁾。あらかじめ戦乱に巻き込まれることを想定して、それなりの予防策をとっていたのである。だからこそ戦乱が終わると共に村は復興し、農業も再開できた。この山小屋に身を隠すという対応は、案外疫病などの場合にも共通するのではないだろうか。

このことは村や郷、郡や国といった地域概念と、そこに働いた共同体意識がいかなるものであったのかという問題にも直結する。戦国時代には郷や村といった単位と共に郡や国が多く見える。実際に郷や国は社会的な連帯意識の中で大きな役割を果たしていた⁽²³⁾。また、幕藩体制といわれ、藩の独自性が強調される近世においても、国や郡は現実の意味を持っていた⁽²⁴⁾。近世の村においてもいくつかの村々で祭る神社があり、入会地や用水などはいくつかの村の連合によっていた⁽²⁵⁾。こうした横のつながりはそのまま災害に対応する際に有効だったはずである。ここに中世・近世といった各時代の共同体の大きさや、その持つ役割などが浮き彫りにされるのではないだろうか。

また、領主や神社・寺院などは災害のおりにどうするのか。天皇や将軍は地域災害や、全国的規模の災害の時にどのような行動をとったり、責任を果たすのか。領主の責任として、治水や地域の安全維持の義務があるのかないのか、こういった視点で領主と災害の関係を見ることも重要である。これは換言すると、公権力とは何かということにつながる。領主が公権力として年貢を徴収し得たのは、反対給付として領民に対し災害時の安全などを保証すべきであるといった観念があったからではないだろうか⁽²⁶⁾。ややもすれば従来強く見られた、領民と領主の階級的対立関係にのみ目を向けるのではなく、防災あるいは災害時の対応という側面から両者の関係を考えることが、大きな成果をもたらすのだろう。

すでに述べたように前近代においては、災害をもたらすものとして悪霊や悪気が想起されていた。そしてこうしたものに対処できる人間は、人間と神や仏の世界とを取り持つことのできる特別な人間・宗教者として意識されていた。中世末に描かれた「洛中洛外図屏風」や「七十一番職人歌合」などを見ると、宗教関係者の数が多いことに驚かされる。社会の生産性が低い中で、近世以降から見るとはるかに高い比率と思われる数の宗教者が必要とされたのは、このためであろう。もしそうだとすると、災害に対して宗教者はいかなる役割を帯びていたのか。それは時代によって変化があるのか否かが、問題になってくる。これは社会の中の身分や役割・職種が災害という異常事態の中で、どのような役割を果たすのかといったことを解明することにもつながるであろう。

このことは、そのまま寺社の地域や国などにおける役割を想起させられる。寺社の棟札には「仏日増輝、法輪常転、王道太平、風調雨順に、五穀豊饒、万民楽業」⁽²⁷⁾などの文言が並ぶ。こうしたことは村の入口で村に悪霊が入ってくるのを防ぐ道祖神、村の入口に設けられて村の安全を保証する神社や寺といった、民俗学的な成果とも結びつき、寺社が五穀豊饒、万民快樂のような、災害から解放された村や町を保証する役割を負っていたと推察させる。各地に何々の災害に強い神様というのがありますが、神や仏が民衆にとって防災とどのように結びついていたかは、今後追求してみたい課題である。

これまで一般民衆の日常的な神や仏に対する観念は史料的な欠如もあって、ほとんど日本史では扱われて

こなかった。むしろこの方面を担ってきたのは民俗学であった。しかしながら、現代人でも何かことがあると神仏を頼み、現代文明を代表するような自動車にも寺院や神社のお札が下がっている。最新の家の中にもいくつかの御守りがある。こうしたものは我々一般人が、災害をいかに取り除くかという意識を如実に示している。あるいはちょっとした病気などにはマジナイをしたりする。このような民俗的な防災意識を歴史学の中にしっかり位置付けることが必要である。たとえば『妙法寺記』という記録によれば、戦国時代の富士山北麓では文明 8 年 (1476) に門松を 2 度立てている。また永正 8 年 (1511) には口痺という病気ははやったので、口痺の鳥を作って送っている。これは民俗の疫病送りと同じで、それが戦国時代にも流行病の対処としてなされていたことを伝える。さらに干害に対処するため雨乞いもたびたび行われている⁽²⁸⁾。民俗として残っている事がらを歴史的に検証し、それを歴史学の中に位置付けることをしていかなければならない。

そうした防災意識のひとつに予兆も存在する。中世の人々は様々な出来事に、神々が人間に何かを知らせている予兆を嗅ぎ取ろうとした。たとえば信濃の諏訪社では中世まで社殿が鳴動すると何かを知らせていると考えられていた⁽²⁹⁾が、こうしたことは多武峯の藤原鎌足の墓や御影の像の破裂などでも意識されていたし、多田満仲の多田院の廟所も何かあると鳴動するとされていた⁽³⁰⁾。どのような点に注意すれば災害を予知できるかに関しては、近年に至るまで各地でさまざまなことが言われてきた⁽³¹⁾。そのようなことを含めて、過去に日本人が培ってきた災害予知とはいったい何かを研究する必要もある。

災害は多くの場合、自然条件などによって左右される。特に自然災害は地域的特色を強く受ける。雪害は日本海側に多く、台風は太平洋側の南岸に多い。火山の災害を受ける場所はある程度決まっている。木曾三川の下流域では水害に備えて水屋があった。長野県では土石流災害は南部に、大雪の害は北部に多い。こうした起きる災害のあり方によって、地域共同体に変化がある可能性もある。ここに地域的特色を見いだせるかもしれないのである。災害を媒介として地域的なつながりが、いかに保たれているか、またその備えは地域の人間にどのような心理的影響を与えるのかといったことを歴史的に明らかにするのも、今後に残されたままの課題である。

災害が人々の心にいかに影響を与えていたかも重要である。各時代において災害そのものがどのように認識されていたか、その原因はどこにあるのか、また何故、災害がもたらされた意識されていたかが問題になる。また、災害の後と前では、人々の災害に対する意識がいかに変わったかが明らかにできればと思う。こうしたことはすでに現在の災害後のアンケートなどで調査されていることである。歴史学では史料の制約が多いが、新たな問題意識をもって史料を見直せば、深層心理にも近づけるのではなかろうか。私は以前天竜川を素材にして、戦国時代あたりから川に対する意識が変わり、現代につながるような治水工事の意識が出てくるのではないかと述べたことがあるが⁽³²⁾、それぞれの工事や場の特質を確認した上で、災害そのものや防災工事が人々にいかに意識されていたかを考えることが重要だろう。

中世においては未開発の大地には土地の神様がいると信じられていたので、大地に新たに人間が開発の手を加えること（普請）は特別な行為だった。このために人間と神との中間に位置し、神を鎮める役割を負った者がいた。それが陰陽師や院内などと呼ばれる人々である。こうした意識は古代にも存在したが、近世になると大きく後退する。たとえば各地に人柱の伝説があるがこれは築城の人柱、堤防の人柱、橋を造る際の人柱にはほぼ限定され、明らかに普請に対する特別な意識が前提になって作られた伝説である⁽³³⁾。中世の築城の際には陰陽師が大地の神を鎮める大きな役割を果たしたが、そうした意識も近世になるとほとんど忘れ去られた⁽³⁴⁾。普請の典型ともいえる大地に穴を開ける鉱山においても、中世までは陰陽師の果たした役割が大きかったが、近世にはその意識はほとんどなくなっている⁽³⁵⁾。また、時を同じくして、戦国時代に日本人の神に対する意識も大きく変化するようである。もしそうだとすると、災害を起こす原因に対しても、戦国時代のころに神が災害も起こすのだという考え方から、災害には何らかの原因があって起きているという、現代の理工系的な発想法が強くなったかもしれないのである。

災害史に関係して注目すべき事がらに、災害がいかに伝承されているかがある。災害が社会に常に意識され、それに対する備えがなされるためには、災害地において災害の事実が伝承されている必要があるからで

ある。そのためには災害の記念碑や、災害にかかわる伝説の収集が必要になる。そして、災害伝説は案外歴史事実を直接的に反映している率が高い。災害の伝説が伝えられるところには、災害が起きることが多い⁽³⁶⁾。その意味で防災史と、災害に対する人々の意識の双方から伝説の収集、その伝説の構築の状態、これが何を目的に作られたかなどを分析していくことが肝要である。

ちなみに、現在の日本の歴史学に大きな影響を与えつつあるものに、社会史・アナル学派・新しい歴史学などといわれるヨーロッパの学界動向の受容がある⁽³⁷⁾。これが受け入れられるのは日本においても、従来見られなかった、あるいは忘れられていた社会史的な歴史の見方に共感を覚える者があるからで、この影響は今後とも続くであろう。特に長期変動や心性といった概念は重要であり、中でも災害史はそこに大きな視点を与えられていると考える。なお、日本においてはアナル学派が提唱したような分野を長い間民俗学が提唱してきており、完全な新視点として受け入れられたわけでもないことを忘れてならないだろう。もしそうだとすると、今後民俗学的視点からの歴史研究が深化されるはずであり、その場合に民俗学と歴史学の双方のかけ橋になる分野のひとつとして、災害史があるといえよう。

ただし、この視点はあくまで歴史学を学ぶ者の立場である。すでに私の場合歴史学という枠組みの中で、独立した分野として災害史を考えており、ここには最初から限界性が存在する。

6. おわりに

災害はすべての人を襲う可能性を持つ。そして災害は、非常に狭い範囲にのみ起きて、被害者も比較的小さい場合と、逆に広範囲に及び多くの人々に被害を与える場合とがある。また、近年の都市化の中では比較的に狭い範囲であっても、稠密な人口を抱える都市に災害が起きて、極めて甚大な被害をもたらす場合や、逆に広い範囲に災害が襲っても人口が過疎で、それほど目に見えた形では被害が伝えられない場合などもあり得る。その意味で、現代が直面する災害は歴史災害と様相を異にする可能性が高い。

ところで、一般に災害が社会全体に与える影響が大きければ大きいほど、普通ならあたり前のこととして記録などにあらわれにくい、さまざまな事がらが浮かび出される割合が高くなる。残存する史料にはごく普通の人々の日常性を伝えるものがほとんど残っていない。これは、あたり前のことを記録して残す必要はほとんどないからである。ところが災害を受けると日常生活が破壊されるので、日常生活ではあたり前として意識されていることに不便が生じ、その実態を伝えようとして記録化される。ここに一般民衆の日常性も浮かび上がることになる。しかも災害は異常なことだけに、記録がたくさん作られ、それが残される可能性が高い。むしろ積極的に災害の歴史を伝えることによって防災意識を持たせようという配慮もあって、文字記録としても残りやすいのである。普通なら政治的な大事件が記録化されることが多いのであるが、災害はすべての人を襲うので一般民衆の姿も、記録者の目に映りやすい。非日常的な事件だけに逆に日常性がうかがい知れる。ここに積極的に災害の記録を通じて社会を見ていこうという視点も可能になる。

しかも災害は多くの場合繰り返され、すべての人が被災する可能性を持つ。それゆえどんな社会であっても災害に対応する社会システムがあったはずである。しかも、それは社会のあり方や災害に対する理解の変化などによって、地域的にも時代的にも推移がある。また災害自体が社会に大きな変化をもたらすきっかけになるのである。この災害に対処する仕組みは必ずしも災害だけでなく、人々の日常的なつながりをも示している。

その意味で、災害史は政治史や経済史などと並ぶ、独自の歴史分野を形成し得ると考える。その視点として私が考えているものについてはすでに挙げた。これは私のいわば歴史学と民俗学との接点的な見方であって、私自身が現代の歴史的制約を受けているので、ある意味では従来の歴史学の枠組みから抜け出すものではない。今後はまったく異なった視点も生み出されるであろう。

ところが、災害史は歴史的な素養のみではなり立たず、災害に対する理工学的な基礎的な知識をも持ち合わせなくては、そのメカニズムなど災害の最も重要な部分を見失ってしまう。災害に対する理工学的知識

と、歴史学的知識との双方を必要とする特別な分野が災害史だとも言える。そこで従来のように、歴史学者の片手間の災害史研究や、理工学関係者の自分の専門とする災害の過去を理解しようとする災害史研究では、独自の災害史研究を深めることができない。この双方をきちんとこなせるような研究者を作ることによって、従来の歴史学的な事件史や、理工系の人達に多い防災史、さらには先に私が挙げたような視点とも異なった、本当の意味での災害史が見えてくる可能性が高い。

他ならぬ京都大学防災研究所は、そうしたことを可能ならしめる条件を備えた数少ない研究所といえよう。文科系と理科系とをドッキングさせた独自の災害史研究のカリキュラムが計画され、新たな学問分野として災害史が確立することを祈りたい。

参考文献

- 1) 笹本正治『「伝える」手段と歴史認識—中世・近世を中心にして—』（『平出考古博物館ノート』第8号・塩尻市立博物館・掲載予定）
- 2) 牧野清『八重山の明和大津波』（私家版・1968），姜徳相『関東大震災』（中公文庫・1975），『弘化四年 善光寺大地震』（信濃毎日新聞社・1977），北原糸子『安政大地震と民衆』（三一書房・1983），『善光寺地震関係資料目録』（県立長野図書館・1984），大石慎三郎『天明三年浅間大噴火日本のポンペイ鎌原村発掘』（角川選書・1986），児玉幸多他編『天明3年浅間山噴火史料集』上下（東京大学出版会・1989）
- 3) たとえば寛永の飢饉と政治の関係，朝尾直弘『日本の歴史 17 鎖国』（小学館・1975）など
- 4) ○ 地震＝石本巳四雄『地震とその研究』（古今書院・1935），武者金吉『日本地震史料』（毎日新聞社・1949），宇佐美龍夫『歴史地震—古記録は語る—』（海洋出版社・1976），宇佐美龍夫『大地震』（そしえて・1978），三木晴男『京都大地震』（思文閣・1979）
○ 火山＝『浅間山爆発史集』（軽井沢測候所・1962），伊藤和明『火山—噴火と災害（カラーブックス）』（保育社・1981），つじよしのぶ『富士山の噴火』（築地書房・1992）
○ 津波＝羽島徳太郎『歴史津波 その挙動を探る』（海洋出版・1977），山下文男『哀史 三陸大津波』（青磁社・1982），山下文男『写真記録近代日本津波誌』（青磁社・1985）
○ 飢饉＝小野武夫『日本近世飢饉史』（学芸社・1935），西村真琴・吉川一郎『日本凶荒史考』（1936），青木大輔『寺院の過去帳からみた岩手県の飢饉』（1967），荒川秀俊『飢饉の歴史』（日本歴史新書）』（至文堂・1968）
○ 水害＝土木学会編『明治以前日本土木史』（岩波書店・1936），宮村忠『水害（中公新書）』（中央公論社・1985）
○ 気象異常＝荒川秀俊『気象変動論』（地人書館・1935），荒川秀俊『近世気象災害志』（地人書館・1963），荒川秀俊『お天気日本史』（文藝春秋社・1972），山本武夫『気候の語る日本の歴史』（そしえて・1976）
- 5) 東京都『昭和22年東京都水災誌』（1951），西尾市『東南海・三河地震体験談集』（西尾市・1974），『昭和47年7月豪雨災害誌』（中国地方建設局・1974），愛知県土木部『47・7豪雨災害復興誌』（災害復興協賛会・1975），昭和36年災害20周年記念行事実行委員会出版部編『語り継ぐ災害の記録』（同会・1981），『昭和58年7月豪雨災害誌』（中国地方建設局・1984），『昭和58年7月豪雨災害の記録』（島根県・1984），長野県西部地震の記録編さん委員会編『まさか王滝に！—長野県西部地震の記録—』（長野県木曾郡王滝村・1986）
- 6) 東京市役所編『東京市史稿・変災篇』（東京市・1917），『岡山県水害史』（岡山県・1901）
- 7) 小鹿島果編『日本災異史』（日本鉱業会・1894，五月書房・1982復刻），本庄栄治郎『史的研究天災

- と対策』（毎日新聞社・1912）、荒川秀俊『災害の歴史』（日本歴史新書・至文堂・1974）、菊池万雄『図説日本の災害』（古今書院・1984）、荒川秀俊・宇佐美龍夫『日本史小百科 22 災害』（近藤出版社・1985）、中島暢太郎・三木晴男・奥田節夫『歴史災害のはなし』（思文閣・1992）
- 8) 首藤伸夫他『災害多発地帯の「災害文化」に関する研究』（平成4年度科学研究費補助金（重点領域研究（1））報告書・1983）
 - 9) その一つの動きとして帝京大学山梨文化財研究所でのシンポジウムがあり、その成果は『考古学と中世史研究』（名著出版・1991）、『中世都市と商人職人』（名著出版・1992）、『中世社会と墳墓』（名著出版・1993）などとして出ている。この他に『北の中世—史跡整備と歴史研究—』（日本エディタースクール出版部・1992）、『日本史の中の柳之御所』（吉川弘文館・1993）などがある。
 - 10) 地震＝寒川旭『地震考古学』（中公新書・1992）
 - 11) 柳田國男『石神問答』（『定本柳田國男集』第12巻・筑摩書房・1969）、武田久吉『道祖神』（アルス・1941）、折口信夫「さへの神祭を中心に」（『折口信夫全集』第15巻・中央公論社・1956）、大護八郎『道祖神』（真珠書院・1966）、中沢厚『石にやどるもの—甲斐の石神と石仏—』（平凡社・1988）、倉石忠彦『道祖神信仰論』（名著出版・1990）
 - 12) 小野重朗「呪術と民俗儀礼」（『日本民俗文化大系第4巻 神と仏』小学館・1983）
 - 13) 矢代和夫『境の神々の物語』（新読書社・1972）、福田アジオ『日本村落の民俗的構造』（弘文堂・1982）、福田アジオ「村の境」（『歴史公論』95号・1983）、垂水実『結界の構造—一つの歴史民俗学的領域論—』（名著出版・1990）、拙著『辻の世界—歴史民俗学的考察—』（名著出版・1991）
 - 14) 中山太郎編『日本民俗学辞典』・『補遺日本民俗学辞典』（梧桐書院・1941）、柳田國男監修『民俗学辞典』（東京堂出版・1951）大間知篤三他編『民俗の辞典』（岩崎美術社・1965）、柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』（平凡社・1970）、倉石忠彦「虫送り」（『日本民俗学』69号・1970）、大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂・1972）、桜井徳太郎編『民間信仰辞典』（東京堂出版・1980）、大島建彦『疫神とその周辺』（岩崎美術社・1985）
 - 15) 高谷重夫『雨の神』（岩崎美術社・1984）
 - 16) 宮田登『ミロク信仰の研究』（未来社・1970）
 - 17) C・アウエハント著、小松和彦他訳『鯨絵』（せりか書房・1986）
 - 18) 黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』（東京大学出版界・1986）、『日本の社会史第2巻 境界領域と交通』（岩波書店・1987）、田村憲美「畿内中世村落の『領域』と百姓」（『歴史学研究』547号・1985）、水野章二「中世村落と境界領域」（『日本史研究』271号・1985）、同「村落と境界」（『日本村落史講座 第2巻』雄山閣・1990）
 - 19) 早川庄八『中世に生きる律令—言葉と事件をめぐって—』（平凡社・1986）、中野堂任『祝儀・吉書・呪符—中世村落の祈りと呪術—』（吉川弘文館・1988）
 - 20) 笹本正治『中世の音・近世の音—鐘の音の結ぶ世界—』（名著出版・1990）
 - 21) 藤木久志「村の隠物・預物」（『ことばの文化史』中世(2)・平凡社・1988）
 - 22) 笹本正治「戦国時代の山小屋」（『信濃』36巻7号・1984）、拙稿「再び戦国時代の山小屋について」（『信濃』41巻11号・1989）、拙稿「山小屋の消長—戦乱を生きる人々—」（『iichiko』24号・1992）、なお以上は拙著『中世の世界から近世の世界へ』（岩田書院・1993）に収録。
 - 23) 勝俣鎮夫「国質・郷質についての考察」（『岐阜史学』56号・1969）、勝俣鎮夫『戦国法成立史論』東京大学出版会・1979に収録）、拙著『戦国大名と職人』（吉川弘文館・1988）
 - 24) 笹本正治「信濃鋳物師と地域結合」（信州大学人文学部『長野県における社会変動と地域的対応の諸形態』・1986）、拙稿「近世の鍋釜商人と鋳掛—遠江山田七郎左衛門配下の場合—」（『地方史研究』36巻3号・1986）
 - 25) 笹本正治「武田氏の郷村支配について」（『信濃』38巻6号・1986、拙著『戦国大名武田氏の研究』

思文閣出版・1993に収録)

- 26) 笹本正治『戦国大名武田氏の信濃支配』(名著出版・1990)
- 27) 『信濃史料』第11巻65頁, 天文2年の長野県下伊那郡阿南町新野の二善寺棟札
- 28) 笹本正治「『妙法寺記』に見る災害」(富士吉田市史編さん室『富士吉田市史研究』8号・1993)
- 29) 笹本正治「消えていった習俗—諏訪上社の場合—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』46集・1992, 『中世の世界から近世の世界へ』所収)
- 30) 水藤真『中世の葬送・墓制—石塔を造立すること—』(吉川弘文館・1991)
- 31) 越智秀一編『天災予知集』(紫雲荘・1936)
- 32) 笹本正治『戦国時代の天竜川』(建設省中部地方建設局天竜川工事事務所・1991)
- 33) 笹本正治「人柱伝説の背後に—普請・災害に対する意識の変化—」(拙著『中世の世界から近世の世界へ』岩田書院・1993, 所収)
- 34) 笹本正治「『院内』考」(信州大学人文学部『人文科学論集』21号・1987, 『中世の世界から近世の世界へ』所収), 拙著『武田氏三代と信濃—信仰と統治の狭間で—』(郷土出版社・1988)
- 35) 笹本正治「博士と金山」(『中世を考える 職人と芸能人』吉川弘文館・1994)
- 36) 笹本正治『天竜川の災害伝説』(建設省中部地方建設局天竜川工事事務所・1993), 拙稿「災害文化としての伝説—長野県南木曾町の蛇拔災害を中心に—」(平成4年度科学研究費補助金〔重点領域研究1〕研究成果報告書『災害多発地帯の「災害文化」に関する研究』1993, これは京都大学防災研究所『防災科学資料センター・ニュース』5号・1993にも収録), 拙稿「大正十二年の木曾谷南部水害と伝承」(信州大学人文学部『内陸地域文化の人文科学的研究Ⅰ』・1994)
- 37) 竹岡敬温『「アナール」学派と社会史』(同文館・1990)。関係翻訳書としては以下のようなものがある。なお煩雑さを避けるため訳者名は省略した。マルク・ブロック『フランス農村史の基本的性格』(創文社・1959), マルク・ブロック『封建社会』(みすず書房・1973), フィリップ・アリエス『＜子供＞の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活—』(みすず書房・1980), E・ルロワ・ラデュリ『新しい歴史—歴史人類学への道—』(新評論・1980), フィリップ・アリエス『死と歴史—西欧中世から現代へ—』(みすず書房・1983), C・ギンズブルク『チーズとうじ虫』(みすず書房・1984), ジャック・ル＝ゴフ『煉獄の誕生』(法政大学出版局・1988), 井上幸治編・監修『フェルナン・ブローデル [1902–1985]』(新評論・1989), フィリップ・アリエス『死を前にした人間』(みすず書房・1990), エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ『モンタイユ』(刀水書房・1990), フィリップ・アリエス『図説 死の歴史』(日本エディタースクール出版部・1990), A・ジェラルド『ヨーロッパ中世社会史事典』(藤原書店・1991), ミシェル・ヴォヴェル『フランス革命の心性』(岩波書店・1992)